



中村 哲

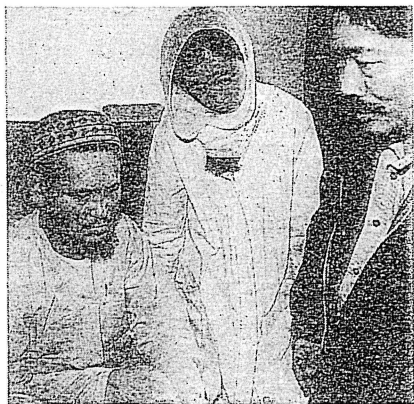


われもと雲の性なれば
さか
かかる塵の世なんである
いざ風にのり胸を張り
空のかなたへいなむかな

ペシャワールにない日本の美しさの
一つは、青空にかかる雲の動きです。
雨上がりの五月晴れの空を新緑の木の
間から見ていると、飽きることはありません。
ちょうど7年前、岡山の邑久
光明園で「研修」していた時も、学
びをよそに、ぼんやりと雲を眺めていま
した。

光明園には〇〇寮と、各病棟に名前
がついています。わけでも「〇雲寮」
と雲を冠する名が目立ちました。治療
法もなく崩れてゆく肉体に耐えながら
隔離生活を余儀なくされた、あの一昔
前の患者たちにとって、雲の自在な動
きは、どんなに慰めと憩いを与えたこ
とでしょう。そしてある時には、自由
への渴望の投影であり、低く重くたれ
こめた雲は自分の境遇の暗さの象徴だ
ったでしょう。

今年は私自身5月13日に帰国後、せ
まい檻に入れられているようで、ほん
のちょっぴりでしょうが、昔のハンセ
ン病患者の悲哀が解るような気がしま
す。美しい雲の天空に比べて人の世は
どうでしょう。まるでフレミングの群



の死の行進のごとく、迫り来る破局に
合わせるように、殺伐なものです。

きらびやかで喧しい割に中身の少な
い過剰包装時代、汗水流して働く事を
厭う一億総貴族時代、カネと効率主義
で頭のいかれた一億総白痴時代、こぞ
かしい評論ばかりで実のない口先時代、
タガが緩んでビジョンを失った無気力
時代。心理学者が言わずとも、「適応
障害」の一つも起こりましょう。

とまれ、私もドンキホーテのつぶや
きを以て、神共に居ますれば一億人た
りとも我ゆかん、雲の彼方のペシャワ
ールに思いを馳せつつ、空を眺める今
日この頃であります。

(前月号で中村医師の帰国日に誤りが
ありました。5月13日と、お詫びして
訂正します。)